

会長コメント等

1. 桜島の火山活動に関する会長コメント

昭和 60 年 5 月 17 日
火山噴火予知連絡会

桜島南岳の噴火活動は依然として活発で、特に昨年 12 月以降は山麓で噴石等による被害が度々発生し、本年 1 月には大隅地方に、4 月には鹿児島市街地に記録的な降灰があった。

最近の地盤変動、地震活動、山腹の地表温度、重力測定等の調査の結果から見ても、大規模噴火につながるような兆候は現在のところ認められない。しかし、山麓部に噴石等を落下させる爆発や多量の降灰をもたらす活動は繰り返されるものと考えられる。

2. 阿蘇山の火山活動に関する会長コメント

昭和 60 年 5 月 17 日
火山噴火予知連絡会

阿蘇山中岳第一火口の火山活動は、昨年 10 月からやや活発化し、火口壁下に新火孔（841 火孔）を生成した。この火孔からは時々火山灰を噴き上げていた。今年になってからは火口底に 1 月 18 日、3 月 1 日、5 月 6 日にそれぞれ新火孔（851、852、853 火孔と命名）を生成しているのが確認された。

その後、851 火孔及び 852 火孔は活動を休止し、活動の主力は 853 火孔に移り、火山灰や噴石をまじえた噴煙を噴き上げる活動を繰り返している。5 月 15 日には拳大ないし人頭大の噴石を火孔から数十 m の高さに噴き上げ、853 火孔と 852 火孔とは合体した。

一方、火山性連続微動の振幅は徐々に増加の傾向にあるが、更に増加することも考えられる。

このような状態はなお当分の間継続するので、今後も火山活動の推移を注意深く監視していく必要がある。

3. 火山観測所世界機構について

昭和 60 年 3 月

火山観測所世界機構 World Organization of Volcano Observatories(WOVO)の設立以来今日までの経緯を簡単に述べる。

1981 年 2 月 フランス領西インド諸島で設立会議、日本からは横山（北大）が全くの個人の資格で参加した。横山はその設立の経緯を、火山噴火予知連絡会第 21 号（昭和 56 年 6 月）、45～48 頁に報告しているので これを参照されたい。

1982 年 8 月 アイスランドにおける IAVCEI 総会の際、WOVO の運営について討議する会合があった。日本からは久保寺（京大）、太田（九大）が出席した。

1983 年 8 月 WOVO は設立以来、世界中の火山観測所のリストを作る以外ほとんど活動がなかったが、IUGG ハンブルグ総会の際、国際火山学協会（IAVCEI）のワーキング・グループの 1 つとなった。その後もほとんど活動がなかった。

1983～84年 UNESCOはInternational Mobile Early-warning System(s) for Volcanic Eruptions (IMEWS)の設立を意図して準備調査を行った。その報告書は1984年末にUNESCOが印刷公表しているので参照されたい。その中でIMEWSの実施機関としてWOVOの名を挙げている。

1984年6月 ハワイでIMEWSの当事者とWOVOの代表者(シグバルダソン教授 — アイスランド —)とが会合した。この機会にWOVOの日本における世話役は、横山から加茂(京大)に交替した。

1984年11月 UNESCOのジャカルダ事務所は、IMEWSと同じくUNESCOの「西太平洋地域の火山学研修及び研究」計画と協同して、フィリピンで「火山観測者に対する研修コース」を実施した。研修生約20人、講師4人、横山が講師の1人として参加した。

1985年度 UNESCOは本年度、IMEWS計画で、WOVOと契約して、データ・ベースの作成その他の活動資金として24,000\$を支出する予定である。WOVOの意見を参考にして、IMEWSは本年度、パプア・ニューギニア或いは中米で「研修コース」を実施する予定と聞いている。

(文責 横山 泉)